
大江戸恋物語

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大江戸恋物語

【Nコード】

N7537P

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

恋にもいろいろございます。

それはそれは古いお話でございます。

まだ、徳川の時代でございました。

江戸の深川におりんという娘がおりました。おりんは器量もよければ、氣立てもいいという娘でしたから、この長屋の誰もがおりんのことを慕っております。

でも、おりんは十七歳。可愛い生娘でございました。おりんは働く男たちの姿を見て育ちましたから、額から汗のしずくをたらすような男が好きでございました。

父親の大工の与平は娘をこの町一番の呉服屋に嫁がせるつもりでおりました。母親のかめは娘が呉服屋の後継ぎよりも大工の定吉に恋心を抱いてることに氣付いておりました。おりんは汗びつしよりになつて鉋かんをかける真剣な定吉を見つめていました。彼もまた、娘のことを氣にかけているようでした。

大工道具に油をこすり、手入れも丁寧な定吉のことは与平もいつも感心しておりました。ですが、彼の気持ちや娘の恋心には氣づかず、呉服屋の後継ぎからの話を進めるつもりでございました。

「ねえ、お前さん、おりんは定吉さんに惚れてるように思うけど」「何言つてやがる、まだまだ自分では決められない小娘さ」

「それに、定吉さんの方もきつと好いてくれるよ」

「そんなことは聞いたことがねえよ」

「一度聞いてやっておくれよ」

「ああ」

でも、与平は自分にそんなことを一度も言つてこない定吉に対して、かめが分かつているような口ぶりなので腹を立てていたのです。

おりんは洗濯物を持つて裏の川へ行きました。今日は前掛けや布巾のほかには自分の腰巻なども洗うつもりでありました。赤の腰巻は月のもので汚れており、誰にも見られてはいけないといつもかめに言われておりました。母が作ってくれた褌は恥ずかしくて毎月それに手のひらほどの布を何重にも縫い、当てておりました。油紙で漏れないように気を使っていました。

でも、多い日は外にも出れず、いつも家の中で過ごさなければなりません。誰もが通る道だと母に教えられても、女は損だとも思つておりました。川から帰ると、長屋の外で定吉の声が外でしまし。思わず耳をそば立ててるおりんにかめが尋ねました。

「おりん、定吉さんのことをそれほど好きなのかい」

「えっ、それは」

「おとつつあんは呉服屋の越後屋さんの後継ぎとの婚礼を進めるつもりでいるよ」

「でも、私は」

「お前がはつきりしないと」

「おつかさん、私、定吉さんが好き。おとつつあんに話して頂戴。婚礼はやめてつて」

「私も今朝言つてみたけどねえ。おとつつあんは若旦那の話に乗り気だからねえ」

「そんな話したこともない人、後生だからやめて頂戴」

大工仕事が終わつて与平たちが帰つてきたところだったのです。今はその越後屋の離れを建てており、後継ぎが嫁をもらった時に住まわせると聞いておりました。だから、与平はおりんがここに住む

かもしれんと、一生懸命な仕事ぶりでした。定吉もそんなこととは露知らず、与平と一緒に鉋を掛けておりました。

いつも夕暮れになり、手元が見えなくなると大工仕事は終わります。

「おい、定吉」

「はい」

「お前は誰か好きな娘はおるんかい」

「あ、あの」

「まさかおりんじゃないよな」

「えっ？」

「おりんは今大事な縁談が持ち上がってるんだ。あの越後屋の若旦那だ」

「そうですか」

「きつとおりんは幸せになるぞ。こんな長屋からおさらばして、あんな大きなお屋敷に住めるようになるんだ」

「そうですね」

「まあ、ちよつと聞いてみただけよ」

「はあ」

定吉は何も言えなかったのです。

定吉の家は与平の長屋より、さらに小さな家でした。母のお吉^{よし}と二人きりで、父は病で倒れて昨年亡くなったばかりでございます。お吉は近所の仕立物をしておりました。でも、それほど仕立て賃が稼げるようなことはなかったのです。この辺りの女たちはみな貧乏でしたから。

大工道具が急に重く感じた定吉です。与平の言葉が心にずっしりと刻まれました。確かに定吉と一緒になつてもおりんは優雅な暮らしとは程遠く、今の母のようなことをするしかないのです。若旦那と一緒になれば、綺麗な着物を着て、お屋敷に住めるのですから。

くさくさしていた定吉は、飲めない酒を飲むことにしました。同じ大工仲間の宗平そうへいと一緒に。宗平は幼馴染で同い年、家も隣同士でしたから、いつも家の中でも大声を出せば伝わるようなものでした。ただ、まずいことに宗平は女好きでありました。いつもいつも女の話ばかりをするので、与平はそんなところを嫌っておりました。

おりんはかめの話から、一刻も早く定吉と真剣な話がしたいと思っております。ところが、定吉は宗平と屋台の茂吉爺さんのところで飲み始めていたのです。

「なあ、おりんちゃんは俺のことどう思ってるかなあ」

「そりゃあ、好きなんじゃないのかい。お前を見る時の目は恋してる女の目だぜ」

「そうかなあ。だが、おりんちゃんには越後屋の若旦那からの縁談があるんだとよ」

「おい、それは勝ち目ないなあ」

しよげかえる定吉。

すると、宗平は

「いい考えがあるぜ」

「何だよ」

「いつそ、二人で逃げたらどうだい。駆け落ちさ」

「無理だよ、うちにはおつかさんがいるし」

「ああ、そんな親孝行なこと言ったら、おりんちゃんとは別れるしかないね」

定吉は涙をいっぱいためて、つぶやきました。

「おりんちゃんはとうするんだろう」

「それなら本人に聞いてみたらいい。明日俺が連れて来てやるよ。あの川のほとりで待ってるよ。お前の仕事が上がったらすぐに来いって言うておくよ」

「ありがとう、恩に着るよ」

宗平はその時は心底定吉のために一肌脱ぐつもりでいました。

ところが、あくる日の夕方、湯上りのいい匂いをさせたおりんは、ほんのり頬を染めて、後れ毛が白い項にかかり、それこそ女好きの宗平にはたまりません。おりんは色白で足首もきゅっと締まったい女です。

「ああ、もう、定吉でなくても好きになっちまうよ」

そう呟きながら、後ろからそつと声を掛けるつもりでした。ところが、おりんはそんな宗平に気付かず手ぬぐいで汗を拭きながら、歩いておりました。おりんの項の汗のしずくが宗平の目にはきらきらと眩しく映りました。何を思ったのか、宗平はわざと背中を抱き寄せたのです。

「ひー、誰！」

「そんなにびつくりしなくてもいいじゃないか」

「あ、宗平さん」

「おりんちゃん、いい匂いだなあ」

「やめてよ」

すると、胸元のふくらみにますます宗平はそそられて、人のいない神社へと連れていこうとします。

「何よ、冗談はやめて」

「ちよつとだけ、話があるんだ。定吉のことだぜ」

その言葉に、びくんとしたおりんは

「定吉さんの？」

「ああ、大事な話だ」

そう言われると、ついていくしかありません。駒犬の後ろに隠れながら、宗平はおりんに言いました。

「ちよつと、大事な話の前に」

といいながら、浴衣の袖口から手を入れようとする宗平、驚いたおりんは声を出そうとするが、まだ生娘でただ震えるばかりで声も出ません。手を押しのけようとすると、さらに、宗平はもう片方の

手で裾に手を入れてくるではありませんか。
おりんは恐怖で目を見開いておりました。

するとその時、

「いたたた」

宗平の手は上から見事に背中へと廻されております。助けてくれたのは越後屋の跡取り息子、清右衛門せいゑもんでした。背が高く、鶯色の羽織が憎いほど似合っております。

「大丈夫ですか」

「はい」

「おい、何をしゃがるんだ。離せ」

「こんな綺麗な娘に悪さするんじゃないよ」

「うるさい！ こっちは大事な話があるんだよ」

「見てごらんよ、娘は泣いてるじゃないか」

宗平は仕方なく手を振りほどいて逃げて行きました。

おりんは今まで清右衛門をちらつとしか見たことがなかったもので、この宗平をあつという間に捕まえたことに驚いておりました。跡取り息子というものは、意気地がなくなよとしたものだと思つていましたから。

「ありがとうございました。普段はあんなことする人じゃないのに」

「それは君が可愛いからだよ」

そんなことを言われた経験がなかったおりんは耳まで赤くなりました。

「今日は家まで送って行こう」

「えっ、大丈夫です」

「いいよ、別に送り狼なんかにならないから」

その言葉にふと笑いながら、おりんは彼に心を許し始めていることにまだ気づかずにおりました。

「私はその長屋に住んでるおりんといいます」

「知ってるよ。うちの親父やお袋がえらい氣にいつてるという話だ」
「……」
「氣にしないでいいよ。おりんちゃんはまだ若い。祝言なんかまださ」
そう言われて妙に寂しい氣持ちがしたのはなぜでしょうか。定吉さんが好きはずなのに。

長屋の入り口まで送ってもらうと、かめが待っておりまして。

「あら、これは若旦那。娘がなにか」

「いいや、ちよつとそこで会って、送り届けただけさ」

おりんは詳しく話すことができずに、その言葉にホッとしておりました。外へ出てきた与平は

「これはこれは若旦那、ありがとうございます」

清右衛門は笑って礼をすると、颯爽と帰って行きました。陰からその様子を見ていた定吉は愕然としました。

「おりんちゃん……」

おりんの目がきらきらと輝いているではありませんか。おりんは清右衛門と話をしたことが初めてでした。今まで金持ちの放蕩息子位に思っていたのが、本当は全く違っていたので驚いていたのです。そして、定吉を慕うのとは違って、清右衛門には心が熱くときめくような氣がしたのです。こんな思いは初めてでした。

おりんは結婚なんかまだと言われたのが、ふと悲しく思えてきました。

一方定吉はおりんが手の届かないところへ行きそうだという辛い思いに駆られておりました。何とか自分の思いを伝えたいとも思いましたが、自分の境遇を考えると口に出してはいけない氣になりました。

翌日から定吉は仕事もろくに手がつかず、与平に叱られてばかりです。

「おい、どうしたんだよ。しっかりせんと、怪我するぜ」

「はい、すみません」

そう言いながら、屋根瓦を担いで上がる定吉は、所謂つ口のそばから足を踏み外してしまったのです。

ガラガラガラガツシャーン。

大音響とともに定吉が転げ落ちました。

運悪く下には値の高い瓦がたくさん積み上げておりました。

「定吉ーっ」

叫びながら大工衆が集まって来ました。定吉の背中は瓦で無残に傷ついておりました。どうも背骨が折れているようです。

「早く、先生のところへ運ばないと」

戸板を持つてくると、そうつと定吉を乗せました。痛みに堪える

定吉は

「棟梁、すみません、大事な瓦を……」

「いいんだ、そんなことよりしっかりせい」

若い者に定吉を運ばせると、割れた瓦を与平は見つめました。

一体、どれだけ支払わなければならないのでしょうか。念入りに拵えたこの瓦は、極上のものでした。大工の賃金で返せるものではありません。

与平は手ぬぐいをとると、越後屋に入って行きました。

「ごめんください、与平です」

その頃、長屋では定吉が屋根から落ちたと大騒ぎでした。おりんはガクガクと膝が震え、

「おっかさん、どうしよう。定吉さんが」

「おりん、しっかりしないと」

おりんは取るものも取りあえず、走って玄庵先生のところへ行きました。

「おりんちゃん、いまは手当てをしているから誰も入れねえ」

宗平はそう言いました。彼もあまりのことに震えておりました。

「昨日はごめんよ。実は定吉がおりんちゃんと話がしたいって伝えるはずだったんだ。お前に惚れてるって」

突然、定吉の言葉を伝えられたおりんは驚きました。

嬉しいというより、戸惑っておりました。おりんはあの夜から清右衛門のことを想っていたのです。定吉への思いは兄のようなものだとして知ったのです。でも、定吉がこんなことになってしまつては、気の毒でなりません。

そこへ、お吉もやって来ました。

「定吉は」

「あ、お吉さん」

おりんは泣き崩れるお吉を抱きしめました。

どれほど時間が経ったでしょうか。玄庵先生が出てきました。

「気の毒だが、定吉はもう歩くことはできんじやろう。背中の骨が見事に折れてしまつて」

その言葉を聞いたお吉は気を失ってしまいました。おりんは一家の働き手を失ったお吉の悲嘆にくれる姿を見ると、何も慰めの言葉も出てきませんでした。

一方、与平は越後屋の座敷で頭を床にこすりつけておりました。

「誠に申し訳ありません。私の使っている者が、このようなことをしかして、お詫びの言葉もございません」

「いくら越後屋といつても、あの瓦は高級品だよ」

「はい、申し訳ございません」

「まあ、怪我した人もいるそうだし、仕方がないがこちらとしては面白くはない」

「はい、ごもつとです」

「まあ、おたくのおりんちゃんをこの際嫁に貰うという話を決めてはどうか」

「は、おりんですか」

「お前にとつても悪い話ではなからう。おりんちゃんの将来を考えてもいい話ではないか。その代わり、瓦は新しいものを作らせよう。その代金はもうよい」

「ははあ、……どうもありがとうございます」

これしか解決策はないのだと、与平は自分に言い聞かせました。その足で玄庵先生のところへ向かった与平は、意気消沈しているお吉に言いました。

「定吉が割った瓦の代金は、とてもわしらでは払えるものではない。だが、越後屋は許してくれるという話だ」

「棟梁、申し訳ありません」

「いや、定吉の容体はどうだ」

「はい、背骨が折れて、玄庵先生はもう歩けないだろうといいました」

「なんと、歩けない……。うちのおりんはどこに」

「今、おかめさんが来て、連れて帰りましたよ。本当になんということでしょう」

与平は気持ちが悪くなっていました。

家に帰ると、おりんはふぬけたように座っておりました。かめが

「あ、お前さん、大変だったねえ」

「ああ、お前たちに話がある。ここに座ってくれ。おりん、お前もだ」

「定吉の怪我は大変なことだ。だが、定吉の割った瓦はとても高く

て弁償などできる額じゃない。長屋がいくつも建つくらいのものだ」
おかめとおりんは震えてきました。

「どうやって返すんですか」

おかめが尋ねると、与平は一息ついた後、おりんに向かって言いました。

「おりん、お前が越後屋の嫁になってくれたら代金もいらぬと言ってくれた」

「えっ、そんな」

「あの越後屋に嫁入りすれば、きっとお前は幸せになれる、この際、この話を受けてもらえぬか」

おりんは昨日ならどれほど嬉しかったかわかりません。でも、定吉の不憫な姿を見て、さらにお吉の悲嘆に暮れている様を思い浮かべると、自分だけがぬくぬくとそれを選ぶというのは許されない気がしました。でも、瓦の代金は誰も払えないということも分かっておりました。

「おとつつあん、私、嫁に行きます」

おりんはきりつとした目で与平に言いました。

もう、清右衛門さんに恋をしない、定吉さんにも。嬉しい思いで嫁いだらお吉さんにも申し訳ないという気がしていたのです。気持ち殺して嫁になる、そう決意したのです。

十日経って、ようやく定吉は目を覚ましました。

「定吉、お前、私がわかるかえ」

そうお吉が言くと、小さく頷きました。玄庵先生は傷は治るだろうと言いましたが、もうこれからは歩くことはできないだろうとも伝えました。定吉は愕然として、布団に顔を隠して声を殺して泣きました。宗平が来て慰めましたが、どんな慰めも定吉の心には届きません。

みんな、おりんが清右衛門のところへなぜ嫁ぐか知っておりまし

たから、おりんのことを責めるものは誰もいませんでした。定吉のために嫁ぐのですから。

清右衛門は事の成り行きを聞いておりましたから、何も言いませんでした。清右衛門はおりんのことを昔の寺子屋時代から知っていました。可愛くてずっと心に秘めておりました。でも、清右衛門は越後屋に生まれてはいても、商売より布の美しさに魅かれて糸をどのように織っていけばどんな柄になるかを考えることに夢中でした。

ですから、京の都や堺の街でどんな柄が好まれているのか、しょっちゅう旅に出ておりました。おりんが娘になり、あの柄を着せたら、こんな帯を結ばせたらと思っておりました。おりんに恋はしても、話す暇もなかったのです。ところが、この話が舞い込んで来て、清右衛門はどこかでホツとしていました。あのおりんが嫁に来てくれるかと思うだけで楽しかったのです。定吉には心苦しく思いましたが。

清右衛門は祝言を迎えるにあたり、おりんの婚礼の白無垢を作るために呼びました。おりんは硬い表情で清右衛門の前に来ました。「おりん、この白無垢の柄を鶴にしようか、牡丹にしようか迷っているのだよ」

「どちらでも」

清右衛門は素っ気ないおりんの気持ちをはかりかねておりました。

「おりん、この祝言は嫌なのか」

「そんなことはございません」

「でも、顔が嬉しそうでない」

「もともとこんな顔でございます」

大きく息をしてから清右衛門は、ふと、傍にあったまんじゅうをおりんの口に入れました。

「食ってみろ」

目を白黒させながら、おりんは食べました。何と美味しいのでしよう。

「美味しいだろう」

「はい、こんな美味しいもの食べたことはありません」

目がきらきらしています。おりんは元から賢い娘。好奇心がいっぱいな娘です。思わず、自分が楽しんでいることが分かったおりんは、あわてて澄ました顔に戻りました。

「ははは、何を澄ましておる、まんじゅうが美味かったら美味い顔でいいではないか」

「私は喜んではいけないのです」

その言葉は、清右衛門を驚かせました。

「どうということなのだ」

静かに清右衛門が尋ねました。おりんは言葉を探しながらぼつぼつ話し始めました。定吉に憧れを抱いていたこと、その頃は越後屋の嫁の話に興味がなかったこと、清右衛門に助けてもらって……好きになったこと。そして、定吉が怪我をして体が動けなくなったこと、瓦の代金を払うことができなかったことなど。清右衛門は一つ一つ頷きながら聞いておりました。

「定吉とは別れてもいいのかい」

「それはもう終わったことですから」

まっすぐに清右衛門の目を見つめながらこう続けました。

「それに、あなたを恋しいと思うこと、こんなに人を恋しいと思ったのは、生まれて初めてかもしれせん」

「それなら、なぜ、心を閉ざすのだ」

「だって、私だけが幸せになるなんて、お天道さんが許しません」

おりんは寂しそうに笑いました。清右衛門はたまらなくなつて、おりんを抱き寄せました。

「おりん、俺はいつまでも待つさ。お前がいろいろなことを吹っ切れてくれることを。子どもの頃からずっと恋していたんだから。今からも待つさ」

清右衛門は優しく耳元で語りました。おりんは気持ちさがほとばしりそうになるのを堪えました。でも、堪え切れずに涙のしずくがぽとりと落ちました。しずくの向こうで清右衛門が優しく微笑んでいました。

定吉が家に戻つたと聞いて、おりんは出かけました。

「ごめんください」

「あ、おりんちゃん」

お吉は機嫌よく迎えてくれました。定吉は自分のせいでおりんが嫁に行くto聞いておりました。

「おりんちゃん、もう婚礼だね」

「ええ、定吉さん。とても顔色がいいわ」

お吉はそつと家を出て、井戸で水汲みをしていると、手が震えてつるべの水が掛かつてしまいました。濡れた裾から垂れるしずくを頭の手ぬぐいで拭きとりながら、お吉は声を押し殺して泣きました。息子が不憫で、おりんが不憫でなりませんでした。でもどうしようもないのです。

「おりんちゃん、幸せになつておくれね」

「ええ」

「あの、その箱を取つておくれ」

箱を開けると、小さな観音様の仏像が出てきました。荒削りではありましたが、なんと優しい顔立ちの観音様でしょう。

「定吉さんが作つたの」

「ああ、何もできなくなっただけ、見よう見まねで作った観音様だ。嫁入りする時に持つていってもらえないか」

「えっ、もらつていいの」

「ああ、妹のようなおりんちゃんの幸せを願つて作つたんだ」

おりんは定吉がわざと妹のようなのというのを聞き逃しませんでした。定吉のどうしようもない気持ちは嫌というほど分かります。でも、二人とも決して口にしてはいけなかつたと思いました。観音様を見つめると涙がこぼれてきます。

涙のしずくが観音様に落ちました。

「定吉さん、私、越後屋の嫁になります。観音様と一緒に参ります」

「ああ、もう会うことはないね。達者でいろよ」

「はい」

おりんは振り返らずに定吉の家を出てきました。床で見送った定吉は、涙でばやけたおりんの姿を目に焼き付けました。

祝言の日、おりんは清右衛門の考えた鶴と亀の亀甲柄を鮮やかに取り入れた白無垢に身を包んで、越後屋に嫁いで行きました。

その夜は、おりんの目に痛みではなく、喜びの涙のしずくが赤い襦袢に落ちました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7537p/>

大江戸恋物語

2010年12月27日16時10分発行